払われる迷い

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
払われる迷い

【Ｎコード】
Ｎ２２２８Ｓ

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
速水丈太郎が占う女性。彼がその女性に話すこととは。速水丈太郎シリーズ番外編です。松本沙耶香も登場します。

第一章

迷い　　払われる

今は違う。昔とは。

ふとだ。速水丈太郎はこんなことを考えた。黒い髪で顔の左半分を隠している。右だけが見えているが色は白く顔は細い。顎はやや先に尖っている。鼻は高く黒い目は切れ長だ。眉は細くその切れ長の目に従っている。

青いスーツに裏地が赤のコートにだ。白いブラウスに赤いネクタイをしている。その彼が今一人の女性を前にしていた。そして彼女の話を聞いているのだ。

その女性はだ。こんなことを言うのだった。細い眉にややふっくらとした顔をしている。優しい穏やかな顔をしており髪は黒くロングにしている。

全体的に穏やかな雰囲気の彼女がだ。速水に話していたのだ。

「今はですね」

「今はなのですね」

「はい、昔と違います」

こう彼に話す。それでそう考えた速水だったのだ。

彼女はだ。さらにこう言うのだった。

「そう思います」

「過去と現在は違いますよ」

速水はここで彼女にこう告げた。

「それは事実です」

「そうですね」

「そして今の貴女は」

彼女に言う。今彼は自分の仕事場にいてそこで彼女の話を聞いているのだ。銀座のビルの一室にあるその個人事務所においてだ。彼

は占いの場を持っている。そこでいつも話をしているのである。つまり彼女は客というわけだ。
その彼女の話を聞いてだ。彼は言うのだった。
「何をお望みですか」
「何をですか」
「貴女の過去が今の貴女にどう関わるかですね」
「はい、それです」
彼女は俯いた顔で速水の言葉に頷いた。
「あの時の私は男の人が好きでした」
「恋愛ですね」
「しかし今の私はです」
ここでだ。顔を曇らせてだった。彼女はこう言うのだった。
「男の人ではなく」
「男の人ではないというと」
「女の人が好きになってしまいました」
そうなったというのである。
「それでその人と」
「一緒になえるかどうかですか」
「どうなるのでしょうか」
身体を前に乗り出してだ。速水に問うてきた。
「そのことは」
「ではです」
「では？」
「そのことを占わせてもらいます」
こう申し出る速水だった。そのうえでまた言うのだった。
「ここは占い師の場所ですから」
「はい、私もです」
ここで彼女も頷いてきた。そのうえでの言葉だった。
「それで占ってもらいたくて来ました」
「その恋の行方をですね」

「御願いします。宜しいでしょうか」
「私は誰も拒むことはありません」
速水は眉を顰めさせる彼女に穏やかな笑みと共に告げた。
「誰もです。来て頂いた方はです」
「その人は」
「誰でも占わせて頂きます」
そうするというのである。
「ですから」
「そうですか。それでは」
「では早速占わせてもらいますね」
言いながら早速懐からタロットカードを出してきた。そうしてだ。
カードを切ってだ。すぐに十字に並べたのだった。ケルト十字の形にしたのだ。タロットカードでよく使われる占いのやり方だ。
そのうえで占いだ。まずは一枚目を出した。それは。
「ふむ」
「そのカードは」
「月ですね」
それであった。月が描かれている。確かにだ。
「迷いですね」
「迷いですか」
「今貴女は迷っておられますね」
そのカードを見ながら話す彼だった。
「恋のことでその通りです」
「月は迷いを現します」
「ではやっぱり」
「そうです、カードに出ました」
こう彼女に話していくのだった。

第二章

「そういうことになります」
「そうなのですか」
「そしてです」
速水の言葉は続く。それと共に二枚目も裏返した。するとだった。
出て来たのはだ。力だった。速水はそれを見て言った。
「問題を解決する糸口はです」
「それは一体何でしょうか」
「一直線に行かれることですね」
それだというのである。
「そうするべきだと」
「一直線にですか」
「はい、そうです」
こう彼女に話すのだった。
「そして今貴女はどうしたいのか」
「それは」
「このカードに出ています」
三枚目を裏返すとだ。今度はだ。
愛し合う二人だった。恋人だ。
「愛を成就されたいのですね」
「はい、そうです」
「わかりました。貴女の願いは」
「有り難うございます」
「ただ」
「ただ？」
「このカードですが」
ここで四枚目が開かれた。それは。
法皇だった。逆になっている。速水はそのカードを見て彼女に話

した。
「同性愛ですから反対する意見が多いですね」
「それは覚悟しています」
「四枚目は自分でも気付いていない方向性が指し示されます」
「周囲の反対ですか」
「それは覚悟して下さい」
　このことを話すのだった。
「それはです」
「わかりました」
「そしてこれまでのことですが」
　五枚目を裏返すと出て来たのは隠者の逆だった。それを見てまた言う速水だった。
「不安で戸惑っておられましたね」
「女の人を好きになることはありませんでした」
「そういうことですね。出ていますよ」
「そうですか。そこに」
「はい、そういうことです」
　言いながらだ。六枚目も引いた。そこにはだ。
　太陽だ。それを見て言う速水だった。
「理解してくれる人は理解してくれ応援してくれますね」
「私のこの愛を」
「そうしてくれます。太陽は全てを祝福してくれます」
「そうなのですか」
「そして次です」
　七枚目はだ。節制の逆だった。速水はそれを見て彼女に話す。
「迷って疲れておられますね」
「どうしても。同じ性別の相手を好きになってしまったことに」
「それもわかりました。このカードにそれが出ています」
「ですか」
「そして取り囲んでいる状況は」

八枚目はそれであった。それは。
開かれた。そこにあったのは。
愚者だった。それを見て言う速水だった。
「向こう見ずですか」
「私の今の恋ですね」
「相手もですね。既に貴女の気持ちは御存知なのですか？」
「はい」
その通りだと答える彼女だった。
「それはもう」
「そうですか。やはり」
「そしてこれは」
「相手も本気で貴女を愛して向こう見ずになってますね」
「そういう意味なのですね」
「その通りです。そして九枚目は」
「それは」
速水はここでも彼女に答えた。

第三章

「貴女が御自身でこのことを何とかできるか」
「自分で成就させられるか」
「それです。それは」
「どうなりますか、それは」
「見て下さい」
この言葉と共にカードをひっくり返した。出て来たのは。
正義だった。速水はそれを彼女に見せて話した。
「できます。誠実であられれば」
「誠実にですね」
「相手の方と誠実に接して下さい。そうすれば進めます」
「そうなのですね」
「周りの反対者に惑わされず。応援してくれる人を信じて」
「そのうえで誠実に」
「そうすればいいのです」
こう彼女に話すのだった。
「それが貴女の採るべき道です」
「わかりました」
「そしてどうなるか」
いよいよ最後のカード十枚目だった。
「これは」
「一体」
引かれた。出たのは。
世界だった。速水はそれを見てすぐに言った。
「おめでとうございます」
「おめでとう、ですか」
「この恋は成就します」
「そうなのですか」

「それも最高の形で、です」
右目と口元をを笑わせてだ。そのうえでの言葉だった。
「成就します」
「それは本当ですか？」
「カードがそう教えています」
こう彼女に話すのだった。
「タロットカードがです」
「そうなのですか」
「はい、この世界は正しい形で出れば最高の状況を示すのです」
「では本当に」
「周囲には注意すべきですが励ましてくれる人もいます」
速水はこのことも話した。
「だからです。貴方は幸せを信じて進まれて下さい」
「本当にそれで」
「占いを信じられなければここには来られませんね」
速水は相手の目をその右目で見てだ。そのうえでこう話した。
「そうですね」
「それはそうですが」
「では信じて下さい」
こう彼女に告げた。
「私の言葉を」
「はい、それでは」
「では占いは終わりです」
微笑みをそのままに穏やかな声で告げてみせた。
「有り難うございました」
「はい、それでは」
こうしてだった。彼女は速水の前から去った。それから暫くの間彼は占い師としての本業だけでなく他の仕事もして多忙だった。そして一月が経った。
その一月が過ぎた時にだ。彼は朝起きてまずはタロットのカード

を引いた。彼の日課であるその日のことを占うことをだ。それをしたのだ。
それはいつも一枚のカードを引くことで行われる。そして出て来たカードは。
「成程」
それを見てだ。速水は微笑んだ。
そしてそのうえでだ。こう呟くのだった。
「では上手くいったのですね」
そしてその微笑みと共に仕事場に向かう。そこに入るとだった。
すぐにだ。彼女が来た。そして満面の笑顔で彼に言ってきたのだ。
「あの」
「お久し振りですね」
速水は自分の席に座ったまま笑顔で彼女に応えた。
「明るい顔をされてますね」
「あっ、はい」
「今日はお仕事は」
あえて大事なことを話さずにだ。世間話をしてみせる彼だった。
「お休みですか」
「夜勤だったんです」
それだと話す彼女だった。

第四章

「それで今はその帰りで」
「そうなのですね」
「はい、それで」
彼女は速水の問いに答えた。そしてだった。自分から言ったのだった。
「あのことですが」
「この前占われたことですね」
「両親には反対されました」
ここで少し暗い顔になる彼女だった。少し俯いてもいる。
「同性愛なんかと言って」
「そうですか」
「はい、ですが」
「ですがですね」
「それでも。彼女とじっくり話し合ってです」
そうしてだというのだ。
「それで今は同棲しています」
「そうですか」
「両親の反対を振り切って。それで」
これも占いにあった通りだった。力である。
「親友の勧めも受けてそれで」
「同棲をはじめられたのですね」
「その通りです。そしてです」
「よかったですね」
速水は優しい微笑みを彼女にまた向けた。
「おめでとうございます」
「これも貴方のお陰です」
満面の笑みで速水に言ってきた。

「本当に」
「いえ、それは私のお陰ではありません」
速水は微笑みのままそのことは否定した。
「私のしたことではありません」
「違うのですか」
「カードが貴方に教えてくれたのです」
そうだというのである。
「タロットカードを通じて神々がです」
「教えてくれたのですか」
「はい、そうです」
こう話すのだった。
「そういうことなのです」
「そうでしたか」
「はい、そして」
「そして？」
「お幸せに」
祝福する笑みになっていた。その笑みで彼女に告げたのだ。
「これから。お幸せに」
「幸せに、ですか」
「愛の本当の成就はこれからです」
「これからなのですか」
「占いは道標ですがそれだけでしかありません」
「では。一体」
「道を決めて歩まれるのは貴方です」
そうだというのである。
「それを御存知下さい」
「そうなのですか」
「はい、そうです」
また言う彼だった。
「ですから。幸せになられる為に」

「歩けと言われるのですね」
「その通りです。それでは」
「はい、それではですね」
「歩まれて下さい」
これが彼女にかけた言葉だった。そうしてだ。こうも告げた。
「また道標が必要だと思われた時は」
「その時はですね」
「またいらして下さい」
こう告げるのだった。

第五章

「ここに」
「はい、それではその時はまた」
「何時でもいますので」
「定休日と臨時休日の日以外はですね」
「はい、いますので」
「わかりました。では何かあればまた」
「いらして下さい」
こう話してだった。彼女は幸せに包まれて事務所を後にした。
そしてである。その夜だ。彼はある場所で飲んでいた。
そこはバーだった。古風な、十九世紀のフランスのそれを思わせる趣のバーであり中は暗くカウンターのところにワインのラベルが並べられている。
ステンドガラスは宗教的な絵画になっており黄色と青、そして赤と緑の輝きをそこに見せている。そうして店の端には樽が並べられている。
そこのカウンターで一人飲んでいるとだ。女が来た。
黒いスーツにズボン、赤いネクタイと白いブラウスである。
長い黒髪を頭の後ろで束ねうなじを見せている。切れ長の奥二重の目に透き通る様な白い肌、面長の顔に高い鼻、それと紅の小さな唇を持っている。
その女が来てだ。速水に声をかけてきたのである。
「満足した顔ね」
「今日はこちらですか」
「ワインを飲みたくなってね」
それでだというのだ。この美女松本沙耶香はこう彼に言うのだった。
「それでなのよ」

「ワインはどのお店でも飲めるのでは？」
「いえ、違うわ」
「違うとは」
「このお店のワインが飲みたくなったのよ」
沙耶香はその切れ長の目を少しだけ細めさせて述べた。
「それでなのよ」
「成程、それでなのですね」
「そうよ。それでね」
「はい」
「隣。いいかしら」
今度はこう彼に言ったのだった。
「隣の席ね。いいかしら」
「ええ、どうぞ」
速水は微笑んで沙耶香に告げた。
「貴女ならば喜んで」
「私ならですね」
「はい」
またこう答える速水だった。
「ですから」
「わかったわ。では好意に甘えさせてもらうわ」
「それでは」
こうして沙耶香は速水の隣に座った。そうしてであった。
二人でワインを飲む。そこで沙耶香は速水にこう言ってきた。
「仕事が上手くいったのね」
「いえ、上手くいったのではなく」
「そうではなくてなのね」
「はい、それとは違います」
こう沙耶香に述べるのだった。
「幸せな物語を見たからです」
「物語ね」

「現実の中の物語を」
それをだというのだ。
「見たので」
「恋のお話ね」
沙耶香はワイングラスを右手に述べた。そこには赤いワインがある。そしてその他にはだ。チーズが数切れその前にあった。
そのチーズを横目に見たうえで。沙耶香はまた言うのだった。
「それね」
「そうです」
「幸せな結末を迎えたのね」
「迎えてそれでなのね」
「はい、そうです」
また言う速水だった。
「それからのこともです」
「話したのね」
「そうです。全てはこれからだと」
「そうね。恋は成就するだけではないからね」
「はじまりと。終わりです」
この二つを話すのだった。
「それをです」
「女同士であっても恋は恋だからね」
「それは成就されて然るべきものですから」
「その通りよ。貴方はいいものを見たわ」
「ええ。本当に」
「そして今それを喜んで。一人で乾杯していたのね」
「貴女が来られることは予想外でした」
それはだというのだ。速水は己のワインを一口含んだうえで述べた。
そしてだった。目の前の皿の上にあるナッツを見た。それを見ての言葉だった。

「それはです」
「あら、そうなの」
「そうです。まさかここに来られるとは」
「気が向いてよ。だからよ」
こう話してだった。そうしてだった。
沙耶香も一杯飲む。それからだった。また話すのだった。
「来たのだけれどね」
「そうですか」
「ええ、それに」
「それにですね」
「いい話を見させてもらって。それで」
「乾杯ですね」
速水から沙耶香に話した。
「そういうことですね」
「そうよ。それじゃあね」
「ええ、それでは」
速水は杯を出してきた。そしてだった。
沙耶香もそうしてきた。それを二人で打ち合わせてだ。
二人でそのワインを飲む。それから二人で祝うのだった。幸せな恋の成就とこれからの幸せをだ。その二つを祝うのであった。

払われる迷い　　完

２０１０・１０・２７

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2228s/

払われる迷い

2011年4月4日22時10分発行